

※スペース節約のため, ベクトルを横に書く場合があります

- (1) $\mathbf{a} \times \mathbf{b} = (-3, 1, 1)$, $V = 4$.
 - (2) $\cos \theta \neq -1$ のとき $\mathbf{u} = \mathbf{0}$, $\cos \theta = -1$ のとき $\mathbf{u} = (x, 0)$ ($x \in \mathbb{R}$) と表せるすべての \mathbf{u} .
 - (3) 最大値なし, 最小値 1.
 - (4) $k = 0, \pm 2$.
 - (5) $h(1, 0) = 0$ だから $(1, 0) \in L$, よって $L \neq \emptyset$ である. $\text{grad}(h) = (3x^2 - y, -x + 3y^2)$ だから, $\text{grad}(h)(\mathbf{u}) = \mathbf{0}$ となるのは $\mathbf{u} = \mathbf{0}$ または $(1/3, 1/3)$ のときに限るが, $h(\mathbf{0}) = -1$, $h(1/3, 1/3) = -28/27$ だから $\mathbf{0}, (1/3, 1/3) \notin L$. 従って L 上 $\text{grad}(h) \neq \mathbf{0}$ だから, L は正則曲線である.
- (1) $\text{div} \mathbf{V} = 14(x^2 + y^2)$, $\text{rot} \mathbf{V} = \mathbf{0}$, $\text{div} \mathbf{W} = 8(x + y)$, $\text{rot} \mathbf{W} = 4(x - y)$.
 - (2) $f(\mathbf{u}) = x^4 + x^2y^2 + y^4$.
 - (3) (1) より $\text{rot} \mathbf{W} \neq \mathbf{0}$ だから, $\text{grad}(g) = \mathbf{W}$ をみたす C^∞ 級関数 g は存在しない.
 - (4) (2) より $\int_l \mathbf{V} \cdot d\mathbf{l} = f(\mathbf{l}(\pi)) - f(\mathbf{l}(0)) = f(\pi, 0) - f(\mathbf{0}) = \pi^4$.
 - (5) $\int_m \mathbf{W} \cdot d\mathbf{m} = \int_0^{2\pi} \begin{pmatrix} 2(\cos^2 t + 1) \\ 2(\sin^2 t + 1) \end{pmatrix} \cdot \begin{pmatrix} -\sin t \\ \cos t \end{pmatrix} dt = 2 \int_0^{2\pi} \left(\frac{1}{3}(\cos^3 t)' + \frac{1}{3}(\sin^3 t)' - \sin t + \cos t \right) dt = 0$.
- V は $\bar{\Omega}$ を含む領域 \mathbb{R}^2 上定義されるから, Gauss の発散定理より $\int_l \mathbf{V} \cdot \mathbf{n} d\mathbf{l} = \int_\Omega \text{div} \mathbf{V} dx dy$. 一方 $\text{div} \mathbf{V} = 8x^6 + x^4y^2 - x^2y^4 + 6y^6$. Ω は直線 $y = x$ に関して線対称だから, Ω 上での x^6 と y^6 の積分, x^4y^2 と x^2y^4 の積分はそれぞれ等しい. よって

$$\int_\Omega \text{div} \mathbf{V} dx dy = \int_\Omega (8x^6 + 6y^6) dx dy = 14 \int_\Omega x^6 dx dy = 14 \int_{y=0}^1 dy \int_{x=0}^1 x^6 dx = 2.$$

- まず $\text{rot} \mathbf{V} = \mathbf{0}$ であることに注意しておく.

$\tilde{l}: [0, 2] \rightarrow \Omega$ を

$$\tilde{l}(t) := \begin{cases} (-t + 2, 0) & 0 \leq t \leq 1, \\ \mathbf{l}(t) & 1 \leq t \leq 2 \end{cases}$$

で定義すると, \tilde{l} は向きのついた区分的に滑らかな閉曲線 L を表す (図 2 を参照のこと).

十分小さい $\epsilon > 0$ に対し, $\mathbf{m}: [0, 2\pi] \rightarrow \Omega$ を $\mathbf{m} := \epsilon(\cos(-t), 3 \sin(-t)) = \epsilon(\cos t, -3 \sin t)$ で定義し, \mathbf{m} で表される向きのついた閉曲線を M とする. L と M で囲まれる有界領域を Ω' とすると, \mathbf{V} は $\bar{\Omega}'$ を含む領域 Ω 上定義され, $\partial\Omega'$ は向きも込めて L と M で表されるから, Green の公式と $\text{rot} \mathbf{V} = \mathbf{0}$ より

$$\int_L \mathbf{V} \cdot d\mathbf{l} + \int_M \mathbf{V} \cdot d\mathbf{m} = \int_{\Omega'} \text{rot} \mathbf{V} dx dy = 0.$$

よって

$$\int_L \mathbf{V} \cdot d\mathbf{l} = - \int_m \mathbf{V} \cdot d\mathbf{m} = - \int_0^{2\pi} \frac{1}{9\epsilon^2(\cos^2 + \sin^2 t)} \epsilon \begin{pmatrix} 3 \sin t \\ \cos t \end{pmatrix} \cdot \epsilon \begin{pmatrix} -\sin t \\ -3 \cos t \end{pmatrix} dt = \frac{1}{3} \int_0^{2\pi} dt = \frac{2\pi}{3}.$$

一方 $\int_L \mathbf{V} \cdot d\mathbf{l} = \int_l \mathbf{V} \cdot d\mathbf{l} + \int_{\tilde{l}} \mathbf{V} \cdot d\tilde{\mathbf{l}}$ であり

$$\int_{\tilde{l}} \mathbf{V} \cdot d\tilde{\mathbf{l}} = \int_0^1 \frac{1}{9(-t+2)^2 + 0} \begin{pmatrix} 0 \\ -t+2 \end{pmatrix} \cdot \begin{pmatrix} -1 \\ 0 \end{pmatrix} dt = 0$$

となるから, 求める積分値は $\frac{2\pi}{3}$.

解説.

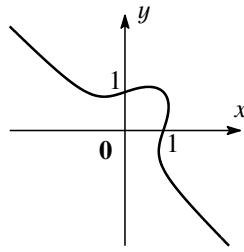


図1 問題1.(5)の曲線 L

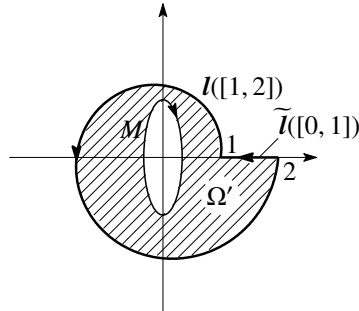


図2 問題4の曲線 L, M

- この講義で導入した関数やベクトル場の定義を知っているか、基本的な関数の取り扱いができるか、を問う問題.
 (1) は $V = |(\mathbf{a} \times \mathbf{b}) \cdot \mathbf{c}|$ を使うと簡単. (2) はレポート2で「 $\text{grad}(f)(\mathbf{u}) = \mathbf{0} \iff \mathbf{u} = \mathbf{0}$ 」だった部分が非自明であること理由. (3) は $\text{div}\mathbf{V} = 2(x-1)^2 + (y-1)^2 + 1$ となる. (4) は $\text{div}(\text{grad}(g)) = \frac{\partial^2 g}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 g}{\partial y^2} = (4-k^2)g$ からわかる. (5) の L は図1のようになる. 図示するのは難しいが、原点のまわりに $\pi/4$ 回転させると少し簡単になるかもしれない. 正則性だけなら計算だけでわかる.
- 線積分(その1)についての理解を問う問題. (2) は $f = x^4 + x^2y^2 + y^4 + c$ (c は定数) も正解. (3) と (5) は矛盾しない. ベクトル場 \mathbf{W} がポテンシャルを持つ必要十分条件は「任意の閉曲線 l に対し $\int_l \mathbf{W} \cdot d\mathbf{l} = 0$ 」だった. (3) が言っているのは「ある1つの閉曲線 m に対し $\int_m \mathbf{W} \cdot d\mathbf{m} = 0$ 」で、これだけでは \mathbf{W} のポテンシャルの有無については何もわからない.
- Gauss の発散定理を題材に、積分の計算力を問う問題. 解答例のような対称性を使った議論は必須ではないが、計算してみると結局は解答例のようなことに気づくだろう. 線積分(その2)を定義通り計算するのは、この問題では得策ではない.
- Green の公式を使った応用. 定義通りに計算すると $\int_1^2 \frac{dt}{1+8\cos^2 2\pi t}$ となり、 V の分母の形が災いして面倒になる(計算可能ではある). $\text{rot}\mathbf{V} = 0$ であるおかげで、Green の定理により問題を M に沿った積分に置き換えることができ、そちらは容易である. L と M の向きに関する考察も必要だが、解答例では省略してある.

配点 : 15, 15, 5, 5 (1: $3 \times 5 = 15$, 2: $3 \times 5 = 15$)

http://math.shinshu-u.ac.jp/~ksakai/19_geometry/19_geometry.html